しんぱん
しどうようもんしゆう
新版 指導要文集

だいよんしyou

ぶつぽう

しやかい

第四章 仏法と社会

しゆうい

ひと

たいせつ

周囲の人を大切に

よめぐ

とのぼら

頼

夜廻りの殿原は、ひとりもたのもしきことはなけれども、

ほけきよう

ゆえ

やしき

と

ひとびと

つね

睦

たも

法華経の故に屋敷を取られたる人々なり。常はむつばせ給

よる

ようじん

もう

との

まも

うべし。また夜の用心のためと申し、かたがた殿の守りと

わ

かた

ひとびと

しょうしよう

こと

見

聞

なるべし。吾が方の人々をば少々ことごとの事をばみずきかずあ

るべし。

209 四条金吾殿御返事 (世雄御書)

しじようきんごどのごへんじ

せおうごしよ

しゆうい

ひと

たいせつ

周囲の人を大切に 1590 ページ 16 行

いかにとが^失ありとも、弟^{おと}どもしばらくも身^みをは^放なち給^{たも}う
な。

210 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

すしゆんてんのうごしよ さんしゆざいほうごしよ

周圀^{しゆうい}の人^{ひと}を大切^{たいせつ}に
1593 ページー9 行

いかに申すとも、鎌倉のえがら夜廻りの殿原にはすぎじ。
もう かまくら 荏 柄 よめぐ とのぼら 過

いかに心にあわぬこと有りとも、かたらい給え。
こころ 合 あ 語 たま

(210) 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

すしゅんてんのうごしよ さんしゅざいほうごしよ

周圀の人を大切に
しゅうい ひと たいせつ
1594 ページ 12 行

にちれん ほけきよう

しん

ひとびと

さきざきか

ひとびと

日蓮と法華経とを信ずる人々をば、前々彼の人々いかなる

顧

たも

うえ

との

いえ

ことありともかえりみ給うべし。その上、殿の家へこの

ひとびとつね

通

敵

夜

い

合

怖

人々常にかようならば、かたきはよる行きあわじとおじる

おや

敵

あらわ

おも

べし。させる親のかたきならねば、顕れてとはよも思わ

隠

もの

ほど

つわもの

つね

睦

じ。かくれん者は、これ程の兵士はなきなり。常にむつば

たま

せ給え。

(210) 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

すしゆんでんのうごしよ

さんしゆざいほうごしよ

しゆうい

ひと

たいせつ

周圀の人を大切に
1594 ページ 16 行

すごろく ふた

いし 掛

とり ひと

はね 飛

双六は二つある石はかけられず、鳥は一つの羽にてとぶこ

まさかど 貞 任

勇 将 ひとり

となし。将門・さだとうがようなりしゆうししようも一人は

かな していとう こ

ろうどう 打 頼

叶わず。されば、舎弟等を子とも郎等ともうちたのみてお

ほけきよう 広 たま よ

わせば、もしや法華経もひろまらせ給いて、世にもあらせ

たま ひとかた 方 人

給わば、一方のかとうどたるべし。

しじようきん(ご)ごしよ

(212) 四条金吾御書

しゆうい ひと たいせつ

周囲の人を大切に 1601 ページー2 行)

すごろく ふた なら いし やぶ どり ひと はね と

双六は二つ並んだ石は破られず、鳥は一つの羽では飛ぶことが

たいらのまさかど あべのさだとう ゆうしろう ひとり のぞ

できません。平将門や安部貞任のような勇将でも一人では望み

かな

を叶えることはできません。したがって舎弟たちをわが子とも郎党

しやてい

こ

ろうとう

ほけきよう

ひろ

けんざい

ともたのんでいれば、法華経も広まり、あなたも健在であればかなら

りつぱ

ほけきよう

みかた

ず立派な法華経の味方になることでありましょう。